兵庫県現代詩協会

会報52号付録・会報バックナンバー②

2022年12月1日 発行・時里二郎

★第18号（2005年12月20日発行、8頁）

①〈報告〉「詩のフェスタひょうご2005」が兵庫県民会館にて開催される（11月23日）。同日、第18回理事会が開かれ、各事業担当者から5月の総会以降11月までの中間報告が行われた。「詩のフェスタひょうご」は鈴木漠氏の司会によって第一部が進行。つづいて本会実行委員長・福井久子氏の「詩はことばとことばの微妙な感覚、心の底に埋まっているものを詩という形式をかりてとりだすもの」という挨拶に始まり、当協会常任理事でもあり、坂本遼研究者である高橋夏男氏による「おかあさんの詩―坂本遼の世界」と題する記念講演が始まった。その講演は、詩集『たんぽぽ』で知られる郷土の詩人坂本遼の作品は、たどたどしい方言の語り口調で貧しい百姓姿の母をいきいきと描き、そのリアリズムと方言による表現ですぐれた達成を示した母に捧げる詩集であると結ばれた。

第二部は直原弘道氏の司会で開始。松尾茂夫氏が選考委員を代表して、県民を対象に募集していた「一般部門」「ジュニア部門」の詩賞の発表と表彰が行われた。今回は前回を上回る741人の募集があった。

玉井洋子子氏は報告の中で「緊張して表彰式と朗読の出番を待っていたジュニア部門の受賞者とその同伴者が、記念撮影を終って会場を出ると、後に続く一般の部の表彰式がさびしく感じられた。式次第に一工夫ほしいところ。…30分の休憩後、三宅武氏の司会でまず乾杯。そして、一般の部受賞者の詩の朗読。程よく酔いの廻ったところで「佳作」入賞者より「佳作」という言葉で区別されるのはいや、「入選」ではだめかと問いかけられる場面も」といった記述がなされている。

②〈会長就任挨拶〉＝福井久子氏「言葉の繋がりの多様性―会長就任にあたって―」（会報50号特別号8頁に掲載）

③〈足立巻一氏追悼文〉

「天秤雑感―天国の足立巻一と同人たち―」三浦照子

「足立牧場には美しい女性は居らんな」と評した詩人もすでに故人となった。詩誌「天秤」の同人も相次いで旅立ち、日々の営みに追われている私たちを肴に、天界での宴はさぞ

女は私と外に一人だけだったので目に付いたのでしょうか「ご婦人の方がお見えになっていますが……」には困ってしまいました。質問にも親切に答えて下さいましたが、どうも興奮のため、舌の回転が思うようにならず、どもってしまって、突っ込んで伺うことが出来ませんでした。〝基底〟に書いていましたように、戦争の申し子的な私の世代のものはレヂスタンス運動の意味がはっきり感じられなくて、現実を何の疑問もなく素直に受け取ってしまう無抵抗さについて、つまり三松三階の窓から見下ろす街路には美しい装いをこらして明るい表情の人々が往来し建物は次々と築かれ、冷たそうな飲み物が飾窓に並んでいる日中、私はそこからイオムの主張する暗さがぴったりとこないのです。すると安西さんは「歴史をお読みなさい」と答えて下さったのですが、それからが大変文明悲観論になってしまって、上階の皆様は口を揃えて日本の歴史の適当な書物は見当たらないとおっしゃるのです。日本はそんなに貧困なのですか。結局森鴎外のものを推薦して下さいました。（以下略）

当時上郡今は空席の森弥生が面と向かってイオム批判をした空気は如何だったか。以後詩人会の記事は途絶えて不明である。〈第21号〉

☆（編集部注／現在の兵庫県現代詩協会が設立されるまで、戦前・戦後を通じて何度か兵庫県を単位とする詩人団体が存在していたことは仄聞していたが、「兵庫県詩人会」という組織が報告されていることの文章は貴重である）

⑧「〈兵庫県詩人会〉のこと」〉和田英子

兵庫県下の詩人を中心とした当「兵庫県現代詩協会」の総会（2005年）は先日二十日行われ順調に十年が経過しました。かねてこの協会ができるまで、兵庫県には詩人の団体、組織きはなかったものと思っていたのですが最近、古い雑誌「航海表」を読みかえしていて、以前に兵庫詩人会が存在していたことを知りました。戦後六年経った一九五一年（昭和26）四月発行の「航海表」通巻24号に次の記事です。

兵庫詩人会設立御案内

現代は〈詩の一般的認識の上昇期〉といわれております。東京をはじめ各地の詩人の会が設立せられ、一般人を対象とした詩の普及と啓蒙、並びに詩学の興隆のための研究が斌んに行われています。私達兵庫県在住の詩人も、いわゆる〈詩の一般的常識の上昇期〉に際して親睦融和をはかり、いささか詩学の興隆に微力ながら力を尽くしたいと考え、こゝに『兵庫県詩人会』（仮称）の設立を企図いたしました。事業内容は、詩の朗読会、詩画展、講演会などによる普及と啓蒙をなし、別に講座、研究会などによって詩の専門的討議をはかりたいと思います。

申込は、神戸市兵庫区松本通二・一三〇

兵庫県詩人会設立準備係

無署名の筆者は「航海表」編集発行者藤本義一であると察します。詩人会の標榜した内容は半世紀を経た今日とほぼ変わっていないことに気付くが、いまも詩を書く周囲の環境がさほど変化していないのも事実です。

兵庫詩人会は設立されたのは、同じ年の十月発行「航海表」通巻27に兵庫詩人会の記事を森弥生が記録していました。

兵庫県詩人会

一昨日兵庫県詩人会姫路支部の会合に出席しました。安西（冬衛）氏をはじめ二十四、五名の集まりでした。MENUの方が三名、イオムは向井さんと柳井さん、最近「花」の詩集を出された自称詩を書かぬ詩人の内海氏（『花』は信之氏の詩集、出席は繁氏か）その他確か神戸大学の仏文科の教師をされているとかの小柄な方（小島輝正氏？）地方詩誌職場詩誌の方など盛会でした。設立会のときお顔を知った年配の方達も二、三お見かけしましたが生憎名前を忘れてしまっておりました。航海表は私一人切りで大変心細く思いました。所属誌の最近の動向の報告などありましたが、航海表の内情にも余りくわしくない私は困ってしまいました。大分むくつけな質問に出会いましたが末席を汚す名前のみの私の手には合いませず、本当に冷や汗三斗というところです。本場の神戸よりも一足先にこの様な会合をもったというので、姫路勢の鼻息も多少荒かったと思われます。小林武雄氏はご出席の予定だったそうですが腹痛のためにお断りの電話がありました。（略）

賑わしいことと思われる。

誇りたかく、心優しい天秤の方々は女性の同人に対して寛大であった。と言うよりも、あまり問題にされていなかったのか、合評会らしき会合でも「マア、ええがな」といった感じで厳しく批評された記憶が無い。

足立さんはあまり映えない牧場の羊に、あろうことか「ミウラくんは散文のほうがエエナア」などとエッセイ集の出版記念会で祝辞を述べられ、私にはやはり詩の才能は無かったのだと、絶望と悲嘆に打ちのめされていると、同人ま静文夫さんは「あれはてるちゃんの詩を否定しているんやない、エッセイを褒めとるんやで」と慰めてきくれたが、いずれにせよ甘やかされた所為かやはり詩的才能は開花せず今日に及んでいる。

その足立さんは大変律儀な人であった。というよりも、決して人を粗末に扱うことをなさらない人柄であった。私の未熟な作品集の度重なる、身の程知らずの出版記念会にも、天秤の末席に繋がっているというだけという関係で、他界されるので欠かさずに出席してくださり、富田砕花先生小島輝正先生はじめ学者、報道関係や企業関係の方がたに適切な対応をして頂いた。もちろん天秤の同人のみなさんも細かな人情味ゆたかな方々であった。私の保護者か父親的な存在であった静さんはそのペンネームのとおり静かなたたずまいの紳士であり、磊落で繊細な米田透さんは、優雅な優しさにあふれた叙情詩で詩誌を飾り、長い療養生活を病院のベッドですごした。絶望的な日々を作品に託しておられた田部信さん、シャイで皮肉っぽく、反面細やかな気配りと遠慮がちな対応に人間的な魅力に包まれた桑島玄二さん、大人（たいじん）の風格で猫屋敷に君臨していらした津高画伯。夫人とともに旅立たれた（阪神・淡路大）震災によって崩壊したお屋敷は、毎年展覧会が開催され、華やかなパーティには多くの来場者とともに、天秤の同人たちが参集した。その宴には一見無口で、近寄りがたい風貌の亜騎保さんも滅多にみられない笑顔で接して下さったと記憶している。また、篠原の伊田耕三さんのお宅では天秤の編集会議が行われたが編集や発送に関しての協議にもまして、発行の金策や広告に苦慮しておられた足立さんの姿が見に浮かぶ。

「天秤」の絶刊を決断された背景を思うとき、小さな詩誌「風神」の発行にすら戸惑いがちな私は、当時の足立さんのご苦労が身に沁みて感じられる。「天秤」の後、静文夫の提案で「風神」を発汗したが、数年間は毎年のように旅立って逝く方々の追悼号になってしまった。この美しい紅葉の季節、逝かれた天秤同人への哀悼は深まるばかりである。

（編集部注／詩人で小説家、エッセイストであった足立巻一氏〈1913-1985〉の想い出記が掲載されています。三浦照子氏と時安喜子「足立巻一と私」のうち三浦照子氏の文章を紹介します。足立氏の詩誌「天秤」同人とその周囲にいた詩人たちの動向が活写されています）

④〈エッセイ〉「いま、自分で自分に思うこと（ひとつの感想として）」サイトウ・ナオミ

⑤〈エッセイ〉「冬の散歩道」長尾佳枝

⑥〈エッセイ〉「詩を大事にする作家」北原文雄（詩人・伊藤桂一について）

⑦〈エッセイ〉「登山と8ミリ映画」北野豪一

⑧〈エッセイ〉「茶の間のTV」渋谷魚彦

⑨〈詩碑探訪14〉「夕暮れの詩人―足立巻一」今村欣史（別枠にて表示）

⑩会員の刊行物・県内情報など（6月～11月）

⑪〈訃報〉▽奥田博之氏（5・12死去）＝28歳の頃からヒマラヤ山麓ラェマクリシュナ僧院にて修行。『ラーマクリシュナの福音』三巻を翻訳。詩集『ガラスのうさぎ』▽さかたしげし氏（11・17死去）＝福井市生まれ。詩誌「第三紀層」「現代詩神戸」に所属。詩集に『浅い眠りの日々』『彼女たち』

★第19号（2006年6月23日発行、8頁）

①〈報告〉6月4日（日）第10回会員総会が神戸市中央区中山手通りのラッセホールで開かれた。

総会に先立ち、同会館5Fコスモスの間で午前11時より第19回理事会が開かれた。活動方針案に掲げた「年刊詩集」発行については、県の助成金制度が隔年に改正され今年度分については刊行が見込めないため、例年通り出版するとすれば参加費の値上げは避けられない旨鈴木漠副会長より説明があり、討議した結果、総会にはかり年刊あるいは、隔年発行かなど全会員によるアンケートの大勢によって判断することを決議し、理事会を終えた。

午後一時より行われた総会では、会長の挨拶ののち総会議長に松尾茂夫副会長を選出し、同氏の司会で議事を進行。初めに玉井洋子事務局担当理事から2005年度の活動報告が行われ、「詩のフェスタひょうご」「足立巻一と天秤の仲間たち展―併設　兵庫詩の現在展・ひょうご詩画展2005」の諸行事や、年刊詩集、会報の発行などの年内活動の報告と、新年度の予定として、「神戸モダニズムの詩人たち展」を開きたい旨の提案があった。

⑨〈詩碑探訪⑭〉「夕暮れの詩人―足立巻一詩碑―」

今村欣史

「磐座が燃えている！」という詩句が思わずわたしの口をついて出た。

見事に色づいたカエデが、足立先生の詩碑に覆いかぶさっていたのである。県立播磨中央公園、いぶしみの丘の晩秋。

隣りに白川渥氏の句碑が立っていて、その隣に、生前、足立先生か敬愛してやまなかった竹中郁氏の詩碑がある。出来れば、足立先生の竹中氏のを並べてほしかった。

足立先生に初めてお会いしたのは、昭和57年の秋だった。わたしが、子どもの通う小学校でPTAの役をしていた時に、「こどもの世界」という題で講演をお願いしたのである。

足立巻一氏の詩碑

最寄りの駅までお迎えに行ったのだが、まだ時間に余裕があって、学校のすぐ近くの拙宅にお立ち寄り下さった。そのおり、子どもも口頭詩を記録していたノートをお見せしたのだが、「これなんかいいですね」と言いながら飽きることを知らずに読み耽って下さった。わたしは時間が心配になり、「先生、そろそろお時間が」というと、さも名残惜しそうに「いずれ又…」と言って席を立たれた。

その後何度かお会いすることがあったが、最後にお会いしたのは、亡くなられる年の二月。

そのころ先生は、「思想の科学」という雑誌に「生活者の数え歌」という題で、神戸新聞の読者文芸欄に投稿してくる人のことを連載しておられた。その取材に赤穂までお供させて頂いたのである。一日中に謦咳に接して幸せだった。

そしてその時に、「この連載の最終回にあなたのことを書かせて下さい」と言われてわたしは、即答できなかったのである。その年の夏に先生は亡くなられてしまわれた。

日本の詩は
神の御名から
はじまる
巻

★所在　加東郡滝野駅下車　★道案内　JR加古川線滝野駅下車北西に2km　中国自動車道　滝野社インターから北西に約4km　〈第18号〉

続いて議長より「財政逼迫により年会費値上げ」の緊急動議が提出され、鈴木副会長より県の助成金の減額など不測の事態が重なったためである旨補足説明があり、年会費現行三千円から四千円へ、今年度分よりの値上げが満場一致承認された。

休憩をはさみ、たかとう匡子副会長の講演「詩と散文のあいだ　井上靖、足立巻一の詩から」が行われた。「いい詩の中にはたっぷり散文がたくわえられている」といった小野十三郎の詩論から説き起こされ、足立巻一の詩「滝」や、作家井上靖の小説の元になった詩「猟銃」が紹介され、しばしロマンに時を忘れた。（報告者＝玉井洋子）

②〈報告〉「3月14日～18日の日程で原田の森ギャラリーで行われた「足立巻一と天秤の仲間たち展」には、のべ４００人余の入場者があった。同時開催の「兵庫詩の現在展」には会員のかかわる詩誌30誌が展示され、併設の詩画展には34名による46点の作品がよせられた。

また期間中行われた文芸評論家・宮崎修二朗氏による講演会「懐想のアダッツアン」には、約１００名の参加があり、宮崎氏の巧みな話術によって足立氏のふところ深いお人柄が鮮やかに甦った。その後ボニー＆クライドでの懇親会で、「君らそれでも詩人か。足立さんは自分の。ことはしゃべらんかったけど、きっちり作品をのこした」と宮崎氏の言われた一頁を、ほろ酔い機嫌の詩人たちはどう聞いたか。足立氏にゆかりの深い方々と宮崎氏の「アダッツアン」への思いの深さとあいまって、この夜の氷雨は一入身にしみた。」（報告者＝玉井洋子）

③〈エッセイ〉「ぼくの病状と詩の関係」高須　剛（別枠に表示）

④〈エッセイ〉「自然に還ろ」在間洋子

⑤〈エッセイ〉「モーツァルト讃―私のお気に入りＫ四六六―」柴田　実

⑥〈エッセイ〉「青い鳥」水こし町子

⑦〈エッセイ〉「季（とき）を得て　象嵌の蝶海渡る」西垣矩美子

⑧〈エッセイ〉「心に残るということは」黒住考子

⑨〈エッセイ〉「意識という奇跡」北岡武司

⑩〈詩碑探訪⑮〉「野口雨情の民謡詩碑「曽根小唄」の碑」　高橋夏男

⑪〈追悼〉仁紙禮子さんの詩（報告者・吉田草平）

糧　　仁紙禮子

橋の下流に／白鷺が　一羽／流れの中ほどに　立っている／流れの方向にむいて　立っている／動かぬうしろ姿で／つめたい雨に濡れている／／切らした白ワインと／人参を　買い足して／灰色の視界が濃くなった／橋の下流に／まだ　白鷺が立っている／帰るに帰れぬ　うしろ姿で／つめたい雨に濡れている

詩集『白鷺の城』（１９９７年刊）より

⑫会員の刊行物（12月～5月）

⑬県内詩誌・機関紙・雑誌　県外詩人団体詩集

★第20号（２００６年12月18日発行、８頁）

①〈報告〉「詩のフェスタひょうご２００６」が兵庫県民会館にて開催された（11月23日）。懸案であった年刊詩集の発行間隔について会員に向けアンケートを実施したところ、返信総数98通だった。内訳は（年刊・35）、（隔年・63）という回答結果をふまえ隔年制とし、２００６年度の刊行は見送りとす

③〈エッセイ〉「ぼくの病状と詩の関係」　高須　剛

二〇〇三年の暮れ近く心不全の再発で、赤穂市民病院に緊急入院した。狭窄している冠動脈の血管（直径一ミリ）一本だけでつながっている心臓の写真を指しながら、主治医は感情をおさえてカテーテル処置の必要性をぼくに告げる。「これはわたしの個人的な感想なんですが」と前置きして。

「高須さんが、八十歳を越えておられるのならぼくは薦めないでしょう。万が一ということもあって危険ですから処置はいたしません。高須さんはまだ七十歳代の若さなので…」主治医は若いということを強調する。つづけて「カテーテル処置をほどこしている時に、血管の弾性が弱っていると破れて出血することがあります。これが危険なのですが、処置によって血液の流れを改善しないと生命の保障はありません、いますぐ決断してください」と静かに迫ってくるのである。

こんなことがあって新たに生命をいただくことができた。現在通院しているがその後の経過をチェックするために、月一回の定期検査をしに赤穂に出かけている。主治医の見解は文書ではないが　「壊死した細胞はもう良くなることはないから、これ以上機能が悪化しないよう現状維持が最良の治療」であるということになろう。診察日は予約制で、これを外すと予想外の時間がかかり一日仕事になる。退院後二年半経っているが、現状は現在も変わっていない。

最初は死刑を宣告された檻のない囚われ人のように、いつの日かわからないうちにある日突然異次元の穴に吸い込まれるようなイメージが浮かんでいたが、時間が積み重なってくると、周囲の風景は微妙に変化してきた。その前の一九九四年に一回目の「心筋梗塞」の発作で倒れたとき以来、ぼくの詩はしだいに変形し、異空間をさまよっていくような感じであった。のち第二回目の発作あたりから意識的に詩が変化していくのが見えるのである。

『湾』創刊号（一九九六年）を出す前年の暮れに『湾』発行の準備号を出した。このなかでぼくは「詩的に生きることの困難さ」という小文で、その時の決意表明めいた心情を書き留めた。つづいて創刊号にはエッセイ「時のかたみのように」で、父に対する想いから過ぎ去っていく時間の記憶を探りながら、父のイメージを求めている自分とその自己を取巻いている状況を発見してきたように思う。これらは準備号の詩作品「旅歌」「夜中に父はヴァイオリンを弾いた」に留めている。

それ以降、ぼくの詩的世界は〈透明なブルーブラックの領域〉に包まれる。この領域は現実であるが超現実、日常であって超日常の世界であろう。

『湾』二十一号の作品「蛹」「聴覚障害」「海蛍」「不眠症」、つづいて『湾』二十二号の「銀やんま」「主治医によるインフォームド・コンセント」にたどりつく。これらはすべて体のいろんな箇所に病気を飼育している健康な病人の呟きである。

ぼくにはこうした病床詩誦風のものと、もひとつ、現在住んでいる土地の全歴史（それは生きてきたもの全ての痕跡のようなものであろうか）あるいは、その土地独自のオリジナルな土地の精神史的記録を夢見ているのかもしれない。しかしこれは夢でしか出会えないような願望詩である。

一九九九年に刊行した詩と写真集『海へ』のほとんどの詩作品と二〇〇二年の『皆勤橋詩選集』の「鮫伝説」「一九四五・ノスタルジア」「向う崎に着けば夕暮」「霧の挽歌」と『湾』二十二号掲載の「凪町ふたたいご」、二十三号「東から西へ」「水晶体・一九五〇・ヒストリー」らがある。

これらの詩群の一つ一つを分析するには、疲れていてぼくには出来ない。霞んでいた目の治療は、眼科医のすすめによって手術でどうにか現状に戻ったが、地球の球体そのものが歪んで見えてくる今日、彼方の原郷への郷愁はますます深まるばかりである。

で、『湾』はどうなるのか。江戸期天保年間の相生港は鰯（ぼら）でおおいに賑わった。いまその相生港も埋立てられ、対岸の造船所の岸壁では、中生代の恐竜となったクレーンが凍っている。やがて南から稲妻とともに風雨がやってくる。『湾』はどう動くか。

〈第19号〉

ることが決議された。

▽つづいて七回目の参加となる「ふれあいの祭典　詩のフェスタひょうご２００６」が開かれた。午後1時、よろこびの受賞者とその家族で会場が埋まり表彰式がはじまる。第一部は鈴木獏氏の司会で進行。実行委員長・福井久子氏の「詩は日常生活に埋没している自分をみつける旅」との挨拶に始まり全国からの応募に謝辞がのべられた。

続いて児童教育研究者井上修子氏による「見えないたからもの―ことばが光るとき―」と題する講演があった。井上氏は「みなさん今日はいいお顔でいらっしゃいましたね」と子供たちのこころにも届く優しいことばでお話を始められた。

「人間ってどれだけすばらしいか。①二本の足であるく。②家族をつくる。③ことばをもった。特にことばは生きた人間の語りかけがなければ決して獲得することができない。テレビやゲームばかりしていては本当のことばが消えてしまう。読むことも大切。遠くにいる人とここにいるように話すことができる。文字というのは記号だからみんなが理解することができる。しかし、本は向こうからやってきてくれないので自分で向かっていかなくてはいけない。本にとって大切なのは手。人間の手は考える脳といわれるくらい。出来るだけたくさんの本と出会って下さい。その出会いが、皆さんがこれから先に困った事や悲しい事があった時、答えてくれるはずです。〈話し言葉〉〈書き言葉〉のほかに最近は〈うちことば〉が流行っています。メールでのやりとり、これはこれからことばを獲得していこうとしている人達にはちょっとお勧め出来ません。微妙なこころの動きが伝わりません。皆さんはいっぱいお話が出来ていっぱい聞いてもらってきたから、今日ごほうびをいただけるようないい詩が書けたんですね。本を読むことで考える力が育ちます。考えるのは自分のことばで考えてください。聞いてくれる人があると伝えたくなる。よくお話しをすると相手のこともよく見えてきます」。講演の三十分が瞬く間にすぎた。最後に子供たちのために一冊の絵本をとりだした彼女の呼びかけに応じ、駆け寄って一心に聞き入る子供たちの姿は、結晶した一篇の詩だった。

小休止の後、たかとう匡子氏の司会で第二部がはじまり、三宅武氏より選考経過報告があり、続いて表彰式と入賞者による詩の朗読。応募総数は昨年を上まわる１１０７名だった。

（玉井洋子記）

②〈エッセイ〉「役所から役所への報告文書に説話を語る不思議」田中荘介

③〈エッセイ〉「マルドロオルの歌」中島妙子

④〈エッセイ〉「ふるさとの先達詩人 赤松月船のこと」佐藤勝太（別枠に表示）

⑤〈エッセイ〉「詩人アメリア・ロッセリに学ぶこと」豊崎美夜

⑥〈エッセイ〉「小野十三郎校長の講評」山下一也

⑦〈エッセイ〉「日記」岩井八重美

⑧〈エッセイ〉「京の紅葉狩り」山本眞弓

⑨〈詩碑探訪〉「杉山先生の詩碑―松江白潟公園―」紫野京子（別枠に表示）

⑩〈報告〉詩のフェスタ２００６入賞者一覧　一般部門Ａ　（高校生を除く）応募数96名　Ｂ　高校生　１府３県９校２５４名。ジュニア部門

④〈エッセイ〉「ふるさとの先達詩人 赤松月船のこと」

佐藤勝太

僧侶であり詩人であった赤松月船を知る人は、今日では少ないだろう。

明治・大正・昭和・平成を生きた人で、私のふるさと岡山県矢掛町横谷にある古刹曹洞宗洞松寺で、平成九年大教師（大僧正）として亡くなった。

一山越えると良寛が修業した円通寺がある。そこから西へ行った鴨方町が、月船の生地である。小学校を終えて井原市の善福寺赤松仏海の養子となり、後上京して日大や東洋大で学んだ。その頃から生田長江に師事し、小説家を志した。横光利一や川端康成から「赤松君はいつになったら小説を書くんだ」と期待され、サトーハチローや今東光からも励まされたが「永平寺」後は平川村の村長を乞われて務めたが、善福寺と洞松寺の住職を兼務した。全詩集のあとがきで、小説が書けなかった、そういう人間が書いた私の詩である―と述懐している。

大正十四年の第一詩集『秋冷』次いで『花粉の日』『明るきセレナード』、昭和五十八年の全詩集と、詩作品は多い。その他評論、詩論書もあり、また学僧として宗教書も数冊を遺している。

（前略）わたしは十六ぺん目の手紙を書いた。／十六ぺん目の手紙は十六年目の手紙である。／返事はこなかった。／わたしはさびしがることの代りに／胸をときめかした。

あのひとの沈黙は／楽器のふたがあけられた證拠ではないか。／純白い鍵盤は、／それはもうすっかりあのひとのもの。／端正と美しさを叩いて／あのひとは、／どんなに狂ほしい熱情をも／おもひきりしづかに弾きはじめる。／その音律のいひようもない甘さを／私はあのひとの沈黙の中に聴く（後略）

月船は、当時流行った民衆詩、未来派、イマジズムなどの潮流に超然と、純粋に我が詩を貫いた。私は月船に逢ったことはない。だがふるさとの詩人を誇りに、親しみを覚えるのだ。

〈第20号〉

⑨〈詩碑探訪〉「杉山先生の詩碑―松江白潟公園―」

紫野京子

それはフィンランドからの一本の電話で始まった。「今迄行ったことがないので。山陰に行きたいんです。それと温泉」。とりあえず翌日に宿だけは予約し、六月末に元留学生だった彼が我が家へ来ることになった。新神戸駅へ迎えに行き、早速山陰への切符を調達する。夜中にレンタカーの予約を済ませ、ほっとしたところで、松江と言えば杉山先生の詩碑があったはず、と思い出す。以前に詩碑について書かれた記事を探したが見当たらず、あきらめかけてふと思い出し、手紙の束を探索。杉山先生からの葉書を見出し、ガイドブックに挟む。

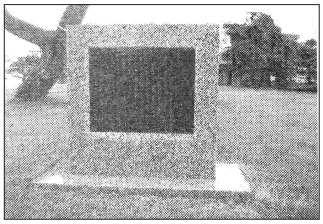
翌朝、彼と我が家の二人の子供達と共にひかりレールスターで岡山へ、そこから特急やくも7号に乗り換えて松江に向かう。こんなに揺れる列車は久しぶりだ。松江からレンタカーで一路出雲へ。

出雲大社は夏越の祓の日で、境内は掃き清められ、神殿には灯が点されていた。参道の脇の大国主命と因幡の白兎の像を眺めていると、ぞろぞろと大勢の神官の行列が大社の門に入って行く。未だ梅雨が明けず、時折降ってくる雨の様子を見ながら、更に日御崎へと向かう。

ようやく日御崎に到着すると、皆は灯台ではなくソフトクリームと書かれた茶店に直行。満足げな顔でこれから灯台へ、という時にいきなりの雷雨で車に逃げ込み、「外から見たからもういいよ。暗くならない内に峠を越えよう。」ということになり、玉造温泉に向かう。

翌日は風土記の丘、八重垣神社、神魂神社を見て、松江市内の島根県立美術館へ向かう。杉山先生の葉書によると、詩碑は白潟公園の中の美術館寄りにあるという。公園の近くで駐車場を探すが停める所がなく、美術館の駐車場に停め、車を降りようとすると再び豪雨。結局皆が美術館を見ている間に私一人で詩碑を訪ねることにする。

宍道湖は強い雨に煙ってほとんどグレイ一色。空と湖の区別もつかない。公園は誰もいない状態で、さすがに心細くなってきた。幾つもの碑が建てられていて、見落とさないように一つ一つ見ながら歩いて行く。やがて湖を望むなだらかな芝生の高みに、その詩碑を見つける。見知らぬ街で旧知の友に出会ったかのような懐かしい思いがした。詩碑は白御影の中に黒御影の面が嵌め込まれ、「旗」の詩が彫られている。傍にもう一基、旧制松江高校の帽子がそのまま白御影の上に置かれた石碑が建てられていて、それ故にこの荒れた天候の中でも寂しげではなかった。周りには捩花や梔子の花も咲いていた。美術館に戻った時には雨は止んでいた。その後、松江城と明々庵を歩きながら、私はずっと見えない「旗」のはためく音を聞いていた。



杉山平一氏「旗」の詩碑

〈第20号〉

（小学生・中学校）応募数853名。小学校（38校・583名）中学校（17校・270名）。
⑫会員の刊行物・県内情報など（6～12月）／県内詩誌・機関紙・雑誌／県外詩人団体詩集

★第21号（2007年6月18日発行、8頁）

①（報告）第21回理事会&第11回総会の報告。
5月20日（日）、ラッセホール（神戸市）にて、福井久子会長の司会で、第21回理事会が開かれた。理事会に続いてハイビスカスの間で第11回総会が開催された。
〈新役員〉常任理事＝福井久子（会長）、鈴木漠、たかとう匡子、松尾茂夫（副会長）、玉井洋子（事務局長）、小西誠（会計）、高橋夏男（会報・兵庫詩の現在展）、谷田寿郎、三宅武（アンソロジー）、渡辺信雄（企画展ほか印刷関係）
（理事）大西隆志、大賀二郎、神田さよ、季村敏夫、玉川侑香、時里二郎（監事）高谷和幸、在間洋子（新顧問）伊勢田史郎、直原弘道、安水稔和、和田栄子（新名誉会員）橋本光子、藤川満智子、山南律子
〈年度計画〉▽「詩のフェスタひょうご」への参画▽毎年3月の恒例行事になっている企画展「兵庫ゆかりの「四季」の詩人たち展」を開催▽二本現代詩人会から要請がきている「西日本ゼミナール」の2008年夏開催への協力
▽（講演会）講師は、福田知子。テーマは「モダニズム詩の登場―詩誌『亜』と『詩と評論』を中心に―」
「詩と創作美学の探求」を続けておられる福田知子氏。テーマは「モダニズム詩の登場―詩誌『亜』と『詩と詩論』を中心に―」。「3月に神戸でモダニズムについて講演された鶴岡善久氏は、危機意識を内包しない詩はダメだと言われていたけれど、明るいモダニズム詩も私は認めたい」と、研究者から一詩人の表情になって、さらりといってのける彼女の屈託のなさに、ほっとこちらも緊張が解ける。「明るいモダニズム」から「暗いモダニズム」へ、時代が詩人たちを追い込んでいった経緯。講演を聞きながら、詩を書きたいというきわめて個人的な思いが、深くこの国の根にとどく営為であることが、なんだかひどく切実に感じられ、自身の自覚のなさが少し怖い気がした。（報告者・玉井洋子）
▽（懇親会）「地下のパンジーの間で、三宅武、谷田寿郎両理事の軽妙な司会で宴が進み、飛び入り参加もあって詩の朗読とスピーチで大盛り上がり。尽きぬ話にやむなく三十分の延長も。これには想定外の延長料金が加算されて、痛っっっ！パーティは予約の時間内で納めるべし。参加者30名。
▽（報告）〈神戸モダニズムの詩人たち展〉3月13日～18日に原田の森ギャラリーを会場として、のべ360人の入場者があった。同時開催の「兵庫詩の現在」には会員のかかわる詩誌30誌が展示され、併設の詩画展には27名の33点の作品が寄せられて盛会だった。（報告者・玉井洋子）
②〈協会前史〉「〈兵庫詩人会〉のこと」和田英子（編集部注・本特別号第1頁に掲載しています）
③〈エッセイ〉『伊勢田史郎詩集』を戴いて」藤井清
④〈エッセイ〉「原生林の藤の花」小西たか子
⑤〈エッセイ〉「『KOBE』との約束」眞野洋子
⑥〈エッセイ〉「詩集『おいしい塩』を上梓して」神田さよ（別枠に表示）。
⑦〈エッセイ〉「保存することのむつかしさ大切さ」中川道子
⑧〈詩碑探訪⑰〉「富田砕花・坂本勝の足跡を訪ねて」大賀二郎（別枠に表示）
⑨〈追悼〉「葛城（啓子）さんの思い出」大石玉子
⑩会員の刊行物・県内情報など／県内詩誌・機関誌・雑誌／会員の刊行物／会員の詩誌――の紹介
⑪〈お知らせ〉アンソロジー『ひょうご現代詩集』について。これまで毎年発行していたが、補助金の減額や会員へのアンケートの結果などで、次号から隔年発行とする。
⑫〈講演記録〉「神戸モダニズムの詩人たち展」（記念講演「モダニズムと現代」要旨）2007・3・17講師・鶴岡善久
原田の森ギャラリー（神戸市灘区）での「神戸モダニズムの詩人たち展」もあと一日となった三月一七日、千葉県在住の詩人、鶴岡善久氏による講演「モダニズムと現代」を聞いた。参加者は七〇人。
「今、私たちは第一次大戦前後のモダニズムが発生した当時と同じような不安感、閉塞感に包まれている」と開会挨拶で福井久子会長。
鶴岡氏は二十台半ばで瀧口修造と出会い、生きたシュールレアリスムに接し続けてこられたことが自身の人生に大きくプラスしたと語る。
瀧口修造はアンドレ・ブルドンに傾倒し、シュールレアリスムの発想にそって戦前・戦後を通して活動を続けた詩人・美術評論家。
フランスでは既成概念をすべてうちこわしてしまうダダからシュールレアリスムへ移行していたが、日本では両者は直結せず、1929年（昭和4）のシュールレアリスム第二宣言「文学や芸術の世界を革新するためには、生活や社会を変えなければ本当の意味でのアバンギャルドは完結しうない」の方向に向かわずフォルマリズムへ傾斜。それに危機を感じて呼びかけをしていた滝口は治安維持法にかかり逮捕される。
神戸にも日本が長い戦争に突入する前、時代をはげしく映し出す危機的要素をもってすぐれた詩を書いていた人たちがいた。それがのちに神戸詩人事件にまで発展。なかでも濱名興志春はシュールレアリスムの精神を非常に正確に理解できていた稀有な存在。治安維持法で詩人が検挙され実刑を受けのは神戸の詩人たちと、シュールレアリスム関係では滝口以外にいない。
この例をみても当時の神戸の「詩」のレベルが高かったことがうかがえる。しかし、シュールレアリスム、あるいはモ

⑥〈エッセイ〉「詩集『おいしい塩』を上梓して」神田さよ

今年の始めに詩集『おいしい塩』を出版した。それぞれの作品は、場面、場面で書き留めたものだが、一冊の詩集になると、自分の全体像らしきものが見えてくる。
十二年間の震災後の詩を十数編組み入れた。未だ被災者の心から消えない震災の傷。ささやかな訪問活動をするなかで書いた作品である。いつも弱い立場の人々は取りこぼされる。底辺の立場から上を見上げると社会というものがよく見えてくる。
一九六〇年後半に学生生活を送った私は、当時の学園紛争の渦の中にいた。今まで、疑問にも思わなかった周辺の事実や過去の事実に不信感をもつことになった。それは、惹いては自分に対する疑問、不信である。ノンポリ女子大生だった私は、純粋に正義を求めて運動に関心をもった。しかし、結局は、一九七〇年に卒業する時には充分に挫折感を味わい、「おとな」になっている自分を苦い目で見つめていた。諦めのような敗北感が襲う。その時の自分に詩集は帰らせてくれた。そして、それが敗北感だけではなかったことを、今考えるのである。
父の思い出を書いた詩もこの詩集に入れた。父は学徒兵として兵隊に送られた。多くの戦友たちの死に遭遇した。生き残って、敗戦後。五十五年近く生きた父。私はこの詩集を纏めて、父の戦争に対する思いと、学園闘争の論点になった反戦の思想、更にはボランティアを通して弱者と呼ばれる底辺の人々とを、重ね合わせて、再び考えることとなった。
書くことは、自分が何者であるかを知ること、ということを、この詩集を出版して改めて思ったのであった。自分を知ると言っても、それは幻想かもしれない。しかし、幻想の次には、新しい現実があって、また異なる自分が現れるかもしれない。次の詩集を出すのが楽しみになってきた。
〈第21号〉

ダニズムを通過してきた詩人たちがなぜ戦争賛美にのめりこんでいったのか。そこを考えなければモダニズムやアバンギャルドを戦後につなげてはいけない。

鶴岡氏は関係資料を集め、永田助太郎、楠田一郎、棚夏針手など埋もれた詩人を掘り起こし検証を続けてこられた。

詩人は時代をきちんと見、時代を先取りする気概をもって作品を書かなくてはいけない。モダニズムが現在生きているものとして扱われるとすれば、それは今回のこの企画で光をあてられた〝神戸モダニズムの詩人たち〟、あるいは楠田一郎、冨士原清一、瀧口修造らがもった危機感に通じるところにつきぬけていくものでなければならない。

日本のシュールレアリスム研究の第一人者、鶴岡善久氏による約九十分にわたるお話は示唆に富んだことばでこうしめくくられた。

（文責・玉井洋子）

⑬会員の刊行物（12月～5月）

⑭県内詩誌・機関紙・雑誌　県外詩人団体詩集

★第22号（2007年12月18日発行、8頁）

①〈報告〉第22回理事会が11月11日（日）、兵庫県民会館で開催された。つづいて〈第8回詩のフェスタひょうご2007〉が同会場で行われた。実行委員長・福井久子氏が「ことばの襞をゆたかにし、こころを通わせられれば」と挨拶。児童教育研究家小崎佳奈子氏による「少しできます　作文の妙薬―たとえのもつ底力―」と題する記念講演があった。

少休止ののち審査委員を代表し直原弘道、高谷和幸氏による各部門の選考経過報告と、表彰式。作者による朗読が続く。一般部門は懇親会の中での受賞作のお披露目。懇親会司会は鈴木漠氏。東京、京都、新潟からの参加も。新潟地震の被災者、鮮一孝氏のリアルな体験談を聞きながら、私たちの街をおそった阪神・淡路大震災がはるか昔の出来事に思われる。雪の季節。一日もはやい復興を祈るのみ。午後5時、更なる発展を期しておひらきに。参加者27名。応募総数848名であった。

②〈報告〉「四季」の詩人たち展―鈴木漠

堀辰雄、三好達治、津村信夫、丸山薫などの編集になる詩誌「四季」によって展開された主知的抒情詩は、当時の詩壇、文壇に一時代を画するのみならず以後の詩人たちにも多大の影響を与えた。第一次「四季」から第四次「四季」までの間に籍を置いた詩人たち、前述の編集同人以外にも例えば、立原道造、中原中也、竹中郁、杉山平一、神保光太郎、阪本越郎、伊東静雄あるいは論壇の雄小林秀雄、保田与重郎といった錚錚たる顔ぶれを見ても、「四季」の存在自体がいかにエポック・メーキングな出来ごとだったかを窺い知る思いがする。

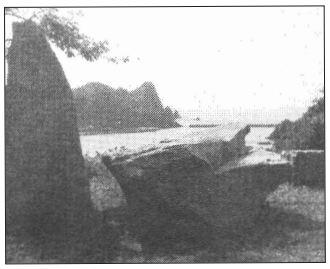
「四季」の中心をなす詩人たちはいずれも、かつてモダニズムの洗礼を受け西欧の詩法に学びながらも、知的な美意識にもとづく抒情詩の確立をめざしていたが、時代は日中戦争から太平洋戦争へと否応なく奈落の闇を転げ落ちる風潮にあった。「四季」の誌面自体に、戦意高揚を煽るがごとき作品いわゆる〝戦争協力詩〟が掲載されることはなかったが、当時の新聞雑誌の要請に応えて書かれた時局詩（機会詩）が、戦後になって「荒地」グループの詩人たちなどから、「戦争協力詩を書いた戦犯詩人」として厳しく糾弾されることになる。たとえば三好達治の戦死者を悼む詩「おんたまを故山に迎ふ」などが挙げられるが、これらの詩も読みようによっては「厭戦詩」と見られなくもない。そのあたりについて、元「四季」同人であられた杉山平一氏も或る雑誌のインタヴューに答えて、戦争協力詩の見本と見做され前線の兵士たちからも愛誦された大木惇夫の「戦友別盃の歌」を例にあげて「この詩の底にあるのは、敵への憎悪や怒りではなく、人間の愛別離苦なんですよ。それが多くの人たちに歌われていった。そのリズムなり情感が多くの人に共有されていった事実はあるんですね。」と述べておられる。過酷で非情な戦争下にあって、詩が辛うじて人間のモラルを支えていた一面も否定できない。今、沖縄戦の記述をめぐる教科書問題や戦争の歴史、平和憲法存続の危機にわれわれも直面しているが、そういう時代だからこそ、「四季」の詩人たちの詩を総括し、多少にかかわらず影響を受けた後進のわれわれ自身の原点をも自ら検証する必要があることを痛感せざるを得ないであろう。来年三月開催予定の恒例の企画展を《「四季」と兵庫の詩人たち展》として、「四季」同人であった津村信夫・竹中郁・杉山平一の兵庫ゆかりの三詩人を中心に据えた展示を準備する所以である。記念講演をご快諾下さった杉山先生の講話も実に楽しみである。企画展が盛大裡に終始するよう、会員諸兄姉のご支援とご協力をぜひともお願いしておきたい。

私ごとにわたって恐縮だが、私（鈴木）自身、片田舎の高校生だったころ、津村信夫の詩に親しみ、津村が幼年時代を過ごした神戸の街に強く憧れた。葺合区熊内通とか雲中小学校などの固有名詞を諳じたものだ。後に高校を終えた私か迷わず神戸の船会社に就職した要因の一つでもあった。津村信夫の詩に親炙するあまり、当時鎌倉に母堂と暮らしておられた

⑧〈詩碑探訪⑰〉「富田砕花・阪本勝の足跡を訪ねて」

大賀二郎

二〇〇六年八月二八日、故富田砕花・阪本勝の足跡を訪ねて、希望者による見学会がありました。観光バスで芦屋・神戸を出発しました。途中、仙賀松雄氏のご案内のもと走りました。沿道こんなに縁のある地があるとは。まず文学の古里ともいわれる湯村温泉で夢千代資料館などを見学しました。清流の傍らに熱湯が立ち上がっていて、即製のゆで卵を賞味しながら散策しました。それから途中の温泉で昼食しました。短時間ですが温泉に入られた方もいます。それから余部の鉄橋に出ました。高さには圧倒されました。運良く列車が雲の上を轟音で通り過ぎました。往時の鉄道技術の粋を尽くして建設されましたが、もう寿命で危険となりました。これが見納めになるかもしれません。



浜坂町（現・新温泉町）
にある富田砕花氏の詩碑

最後は富田砕花の自然法璽の詩碑のある浜坂ユースホステル。続いて小三尾の集落を過ぎて山麓で下車。しばらくコシダ、ウラジロなどが茂る山林をじぐざぐに登る。シジュウカラ、コゲラなどの囀りが聞こえる。狭い台地にユースホステルがありました。海と夕日とカニとイカが有名。自然学校、人間交流体験で賑わっているはずが、夏休みも末で人影はありません。裏庭に出ると眺望がぱっと開けました。海に張り出した小空間から、断崖絶壁に囲まれた島礁が凄い迫力で見えました。その岩上にも自然石の歌碑がありました。

御火の浦　三尾の小島の大島に　野路菊咲かば
愛しからまし。

平成三年浜坂町によって建立されました。日本海を詠んだ歌を他にも残しています。ただ一羽なる平家鳥かも、物の音絶えし海蝕の洞など自然回帰の数々の名作があります。これらの県下の作品の数々が詩の交響楽となって、不滅の兵庫讃歌が生まれたのでしょう。

〈第21号〉

津村信夫の遺児で女子中学生だった津村初枝さん（現在も鎌倉市にお住まいの春木初枝氏）と、しばらくの間文通をお願いした記憶がある。どんなことを語り合ったのか内容はまったく失念してしまったが、たぶん夭折した津村信夫に捧げるオマージュ、熱烈なファン・レターでもあっただろうと、いささか面の赤らむ思いで回想されるのである。

③〈エッセイ〉「深い眠りのなかで過ごした日々」寺田操

ある日とつぜん、詩を書くわたし（あなた）に詩のことばが降りてこなくなるという怖い体験がなかったろうか。待っても待っても詩のことばが降りてこないのに、長い間の習性で詩は書けるし、感度を失いはじめても他者の詩集も読める。なのに、ことばが降り立つときの震えるような恩寵のときに見放されてしまったという恐怖が、ひたひたと内的世界を占領しはじめたころのこと。

「もう、そろそろ次の詩集を出すころでは」と、いわれるたびに姿を消したくなっていた。わたしは寡黙な詩人ではなかったから、一九九二年に第三詩集『モアイ　moai』を上梓してからも、おびただしい数の詩を活字にしてきた。だが、『モアイ』以上の世界を構築できていないことが、わたしをうちのめしていた。一冊、一冊が完璧にまとまり、別の色彩を持つ世界になっていなければという強い理想があったからだ。書きたいのに一行も書けなくなる……といった完璧な失語状態なら、あきらめもつく。けれど、詩のことばと日常のことばの深い裂傷に、詩のことばの片鱗が仮死状態で眠っていることは辛かった。批評と実作の両翼で書いてきたから片翼だけでは限界だ。もうここまでだ、と思いたって詩時評や詩集評の連載を断念し、現代詩欄外に出たのは、震災から数年後のことだ。

深い眠りに入ってから百年以上も経過したような気がする。眠りのなかにあっても、詩がどこにあるかといった情報は送りこまれてくるので、脳髄が微かに反応するし、詩のようなものも書かれる。数年に一度くらいは詩を書く機会を与えられるのだが、活字になった詩をみて俄然後悔する。納得できる詩ではないからだ。それでも地方紙や情報誌などで書く文章にポエジーを感じてくださる読者があれば、凍りついた身体が少し温まる。おもいがけなく童話の新聞連載までしてしまった。

眠り姫状態のわたしを救ってくれていたのは、ライフ・ワークである一九二〇・三〇年代の詩人たちと対話する仕事で、今年は金子光晴、北川冬彦を素描した。いずれも個人詩誌や情報誌のご好意に甘えてきた。ぼつぼつ詩集評が可能となってきたこのごろだが、まだ、まどろみのなかにいる。

④〈エッセイ〉「クマゼミ」中嶋康雄
⑤〈エッセイ〉「受け入れてもらっていたのは」芦田はるみ
⑥〈エッセイ〉「あのひとの棲む国―茨木のり子の想像力」寺岡良信
⑦〈エッセイ〉「挿絵がうれしい」牧田栄子
⑧〈エッセイ〉「本の思い出」田村周平
⑨〈エッセイ〉「アダージョ・イン・ジー・マイナー」梓野陽子
⑩〈会員情報―行事・受賞ほか〉
⑪〈訃報〉西垣矩美子さん、12月9日逝去。11日葬儀。
⑫〈詩誌紹介34〉「歩きはじめて〈それから〉」玉川侑香
⑬〈詩碑探訪18〉「内海信之　樹下の碑」山名才
⑭会員の刊行物・県内情報など（6～11月）・県外詩人団体詩集・県外詩人団体会報

★第23号（2008年6月17日発行、8頁）

①〈報告〉第23回理事会と第12回総会が5月31日（土）に明石市の「ザンビア明石」において開催された。アンソロジー「ひょうご現代詩集2007」の久々の出版を祝って午後の懇親会で乾杯。「ふれあいの祭典―詩のフェスタひょうご2008」は11月16日（日）に開催の予定に。続いての第12回総会では、会員総数189名のうち出席34・委任状95人を得て成立。

▽休憩を挟んで関西学院大學名誉教授田中敏弘氏の「八木重吉の詩境」と題する約五十分の記念講演があった。「短歌で熱烈なラブレターを書き送り、島田とみ子を妻にした重吉が、英語教師となってはじめて赴任した地が神戸市・御影。そこで詩を書きはじめる。その作品には師範学校時代に受洗したキリスト教の信仰が色濃く反映されている。わずか29歳でなくなった重吉の第一詩集『秋の瞳』には、キリストのこころを自分のこころとしたいという切なるいのりがこめられている。信仰の深まりが重吉の詩をかえていった。20代の頃から重吉と対話してきたといわれる田中氏。重吉詩における詩と信仰の問題には諸説あるが、どちらを欠いても重吉詩は語れない。その相克と切り結びは最後まで続いていただとご自身の見解をのべられた。静かなそのことばの向こう側に、十字架を背負ってゴルゴタの丘を上る一人の孤独な詩人がみえてくる。摂津御影を出発点とした八木重吉の透明なかなしみとさびしさに寄りそっていくとき、現代社会が失っている何かにふと気づかされてしまうのだ。（報告・玉井洋子）

②〈エッセイ〉「私の内なる重吉」田中敏弘

戦後、井上良雄、鈴木俊郎、佐古純一郎らにより、次々と八木重吉の詩集が出始めたとき、二〇代の私は重吉の詩に初めて出会った。その後、私は折りにふれて重吉詩に親しむようになった。

大学を出てキリスト教主義大学で経済学の研究・教育にたずさわるようになり、チャペルでの講話で重吉とその詩の世界について幾度か語ることもあり、また教会で重吉における詩と信仰の「切り結び」について述べる機会があった。

こうした重吉との出会いから、私の「内なる重吉」は次第に心の奥深くに入りこむこととなった。

自然と私は重吉に語りかけ問いかけるようになった。日常の中で、また非日常の状況下で、重吉に問いかけた。この対話が次第に無くてならないものになっていった。

しかし、私がこの重吉との出会いと対話が私自身にとってもっと深い意味をもつことを本当に気付かせたのは、一三年前の阪神淡路大震災であった。あの日の午前五時四六分、大地震は妻と私の二人の住む家を一瞬者の三好達治を表敬訪問。戦争がはげしくなり疎開した福井の三国で偶然三好達治と再会。三好は支那事変の時は戦争に真っ向から反対し、アメリカとの戦争では「アングロサクソン」と攻撃したが、彼の意図するところは、ベトナム戦争の反米闘争と同じジャンルのものだったと思う。

こういう場で四季のことを語ることはこれまであまりなかった。戦後、戦争詩を書いたかどで戦争犯罪のスケープゴートとなった「四季」だったから、公然と語ることが憚られてきた。最後の「四季」同人となった杉山氏。当時の同人は26名。堀の友人、田中克己は伊東静雄を連れてきた。伊東は日本浪漫派の保田与重郎を連れ来るなどし、はじめの頃の「四季」とは詩の傾向がちがってきていた。初期同人で第四次まで残ったのは丸山薫のみ。同人に堀辰雄の未亡人、萩原葉子、室生朝子の三人を入れて再開するも、これを「四季」の落城と評した安西均。それから間もなく「四季」は終焉を迎えた。

日本の詩史を彩るきら星のごとき詩人の名前が随所に。汲めども尽きぬ鉱脈を掘り当てたようにとうとうと流れる杉山氏のお話。だが、その語り口は、ほのぼのとして愉快。

続く第二部の対談で安水氏は、青年期に愛読した「四季」派の詩人達の名をあげ、杉山氏が今も手放しでは語れない「四季」へのこだわりに対して、そうではない若者がたくさんいたことを伝えたかったと。私達自身への問いとして今後検証の要ある課題だ。

ことのほか寒かった今年の冬だった。ようやく、スプリング　ハズ　カム　ウインター　イズ　オーヴァー。

〈第23号〉

⑯〈記録〉「〈四季と兵庫の詩人たち展　―杉山平一氏講演より―〉スプリング　ハズ　カム　ウインター　イズ　オーヴァー」　玉井洋子

神戸市灘区の「原田の森ギャラリー」で3月11日から16日の日程で兵庫県現代詩協会主催の企画展「四季と兵庫の詩人たち展」が開かれた。会期も終盤の3月15日、杉山平一氏を招き「四季」の想い出を語ってもらった。またプログラムにはなかった安水稔和氏召杉山氏の対談もはさまれ、百人余が楽しく聞き入った。

また、同時開催中の「兵庫詩の現在展」と会員による「詩画展」には、昨年を上回るのべ四百人余の参観があった。

杉山氏は大正3年12月生れの御歳満93歳。とつとつと語られる幼少期から青年時代。「彼には故郷がない」と言われたというエピソードから父母の出会い、福島、神戸、大阪、東京への転々。苦手の数学を避けて受験した松江高校。そこで氏の生涯を通底する感性のめざめと映画への傾倒。津村信夫の詩「小扇」の展開に映画のモンタージュ手法に通じるものを発見、詩に興味をもつ。高校の先輩、花森安治を追って東京帝大へ。そこでの立原道造との出合い。三好達治、丸山薫、堀辰雄編集のしゃれた本「四季」が創刊され、会員となり投稿をはじめる。何度目かにやっと「春」の批評が載った。「ウイットがあるがその手振りが見えるのはダメ」と評されるも、当時はその意味を理解できなかった。詩がよく掲載されるようになり、選

のうちになぎ倒した。二人は不思議に辛ろうじて助かった。家具も何もかも瓦礫と化しただけでなく、永年蓄積されてきた蔵書と研究資料の多くが失われた。

取りあえず娘の家へ身を寄せながら、大学の危機管理に追われるうちに、やがて夏休みに入った。

しかし、来る日も来る日も、軍手をはめ、ブラシで本の中に食い込んだガラス片と砂埃を、一頁一頁取り除いていくしかなかった。こんなとき、私の内なる重吉との対話が自然とあらたに復活した。震災後私が生きるのは、まさに「おまけ」の余生であることを知らされたとき、「今一番重要で、今しか出来ないことは何か」を重言に問い、それまでのプランを根底から考え直すことであった。

この頃、私は話しかけを止めないように、重吉に呼びかけるのがせい一杯だった。小さな紙片に心に浮んだ言葉をともかく書き留め始めた。ただ分ち書きしたにすぎないものながら、ともかくまとめておくことにした。それが私の第一詩集『びんびんとひびいていこう』（一九九六年）であった。

震災後、夙川公園にある重吉の詩碑「幼い日」を、また重吉が教えた御影師範の跡に建つ御影中学の校庭にある小さな詩碑「夕焼」の無事を確かめ、少しづつ少しづつ落着いていった。そして重吉がよく写生に出て描いた油絵「白い路」の面影を求め、御影の地をあてもなく歩き、重吉に話しかけた。語りかける度に私に見えていたのは、とみ子、桃子と三人でとった二六歳の重吉であった。

重吉の詩を深く理解しようとする人は、詩と信仰の在りようをどう受取るかを抜きにすることはできない。八木重吉研究史上、この在りようをめぐり、さまざまな見方が述べられてきた。なかでも田中清光、関茂、今高義也の研究が明らかにしているように、重吉のキリスト教信仰は、「神人合一」を説く富永徳磨による受洗に始まり、内村鑑三の無教会主義の影響を受けつつも、独自の激しさと厳しさで自己を問いつめることから、次第に深まりをみせた。やがて十字架による贖罪と救いの福音を受け入れ、ようやく重吉独自の仕方で、ただイエスのみ名を呼び求めて救われるという称名の信仰と詩の極地に結晶していったことは確かである。

ただ、最後に「病床ノオト」に書き記したおびただしい詩稿を、基本的にもせよ、単なる「遺稿」とのみみて「詩」と認めない受取り方には、やはり疑問が残る。いわゆる「よみがえり」の詩（大正一四年二月）が重吉詩であるのなら、その極点を示す称名の詩と詩稿はその本質において詩でなくて何であろう。

称名の詩にみられる「一筋のこころ宍に魂を揺さぶられない者はいない。ここにこそ重吉の信仰と詩の根源がある。これは何百回語っても語り尽せるものではない。しかし、重吉の「キリストと二人きり」の信仰は、その純粋さゆえに壊れ易く、「社会」の中で「共に生きる」支えとしての信仰の重要性からみるとき、やはりその「限界」はまぬがれない。これは軽々しく言うべきではないが、重吉に深く学びながら、その在りようを自分自身に引き寄せて自らの課題とし、自らの進むべき方向に向って乗り超えてゆこうとする地平においてこそ、重吉の詩と信仰の「切り結び」はいつまでも生き続けるのではなかろうか。私と重吉との対話はいつもここに辿りつく。今日も問い直したいのはこれだけだ。重吉よありがとう。

③〈エッセイ〉「シンポジウムに参加して」飽浦 敏

明治学院大学白金キャンパス、三号館に於いて「沖縄の詩の現在、詩人達の島―沖縄について東京で考える」と題するシンポジウムが催された。「明治学院大学沖縄文学研究会」、と「沖縄国際大学南島文学研究会」主催に依る。

館内は学生や詩人達で一杯であった。

沖縄から三人の詩人が参加されていた。大城貞俊さん。中里友豪さん、宮城隆尋さんです。

東京からは天沢退二郎さんが参加されていた。沖縄の詩人達からの報告概要は次の通りです。

大城貞俊さん。現代詩の挑戦と課題について、戦後から今日までの主な詩人の作品をあげて、極限状況と対峙する詩、アイデンティティの確立等年代を追って解説された。

中里友豪さん。沖縄の政治と文学活動とのかかわりについて、学生時代をふり返り報告された。

米国民政府の圧力に抵抗としての文学活動が盛んであった。そんな状況下、米軍に依る強制土地接収が行われたのを境に、島ぐるみ闘争へと発展した。所謂「琉大文学」と呼ばれるようになる。ために言論統制や検閲制が敷かれ、集会禁止令が出され、学生七名が退学処分にされたことから、「琉大文学」への批判が高まる。そんな混沌の中にあって、社会主義リアリズムと違う道を選択することになる。シュールリアリズムへ、そして現ルポルタージュへと移行して行った。事例をひいての報告に、私は非常に重いものを感じた。理不尽に対する若い正義のエネルギーは窒息状態にあったのだろうと。

宮城隆尋さん。沖縄の現在詩壇の状況を、新人発掘という点からの提案と、現状報告をされた。

後、質疑応答があり、場内から活発な質疑が続いて、時はあっという間に過ぎた。

天沢退二郎先生は最後を締め括る形で話しされた。ご自分の詩作法を交えながら、中でも、印象深かったのは、強く生きる姿を書く。詩を書くことで生きられる地域であることを、外へ向けて書く。詩人は土地の精霊である。とも話された。私にとって、長く覚えているであろう励ましの言葉を拝聴したのでした。

④〈エッセイ〉「淀川で鳥と歩く」谷部良一

⑤〈エッセイ〉「詩の生まれるところ」江田愛二郎

⑥〈エッセイ〉「夕日に包まれて」丸田礼子

⑦〈エッセイ〉「毎日、詩を書く」仲 清人

⑧〈詩誌紹介35「惟（ゆい）」創刊にあたって〉紫野京子

②〈エッセイ〉「賀川豊彦のプロフィル」谷田寿郎

私が賀川豊彦の代表作、『死線を越えて』に出逢ったのは中学生の頃。改造社版の初版本で、伏字が多い文面は、自分なりに想像しながら読んでいました。一九二〇年（大正九）の発行ですから、手にした時はかなり薄汚れていました。

鳥取県の片田舎で藁屋の実家の蜜柑箱を利用した書棚に、何故彼の著書が収まっていたのか。長年の疑問でしたが、二〇〇一年に出版された岩波現代文庫版、『大正デモクラシー』（松尾尊允著）を読んでいて納得。その背景には進歩的な姿勢を貫いたプロテスタント系の鳥取教会や、民本主義の主張と積極的な言論活動を展開した鳥取市連合青年会と山陰青年団の存在があったのです。

その中心メンバーの中の一人に、車屋の親方の大島久次郎がいましたが、私の祖父は神主の息子でありながら、その跡継ぎが否で実家を飛び出し、その車屋の人力車夫として仂いていたこと。またその息子（次男）が、成人して後には、その大島組で仂いていたことを思い出し、やっと納得したのです。

山川出版の『日本史用語集』には、賀川豊彦について、――（一八八八～一九六〇）、キリスト教社会主義者、関西の労仂運動を指導。一九二二年日本農民組合を創立。著書『死線を越えて』はその伝導の体験を描いたもの。――と、簡潔に記されていますが、詩人としての紹介は見当りません。

賀川豊彦が詩人として名をとどめているのは、私の知る限りでは次の二冊、『詩歌人名事辞典』（紀伊国屋書店）と、『現代詩大辞典』（図書センター）ですが、後者の辞典には、――キリスト教倫理の文学を実践した。代表詩集は神学校在学中の貧民街での生活体験に基づく、与謝野晶子序による『涙の二等分』（一九・一一福永書店）。小説に、『死線を越えて』（二〇～二四改造社）、『一粒の麦』（三二、大日本雄弁会講談社）があり、評論に『貧民心理の研究』（一五・一一警醒社書店）等がある。『賀川豊彦全集』（全一一四巻　六二・九～六四・八　キリスト新聞社）がある。――と、かなり詳しく紹介されています。前者の辞典には、『涙の二等分』の他に、『永遠の乳房』が付け加えられています。

処女詩集『涙の二等分』には、与謝野晶子が、「人道主義の詩」と題して序文を寄せていますが、何故彼女が賀川の詩集に序文を書いたのか、気になるところですが、実は彼と同じキリスト者であり、牧師作家として活躍した沖野岩三郎の紹介によるものと云われています。実は賀川豊彦は、詩の他に短歌も作っていて、与謝野晶子の影響も少なからずあったと思われます。

神戸葺合新川の貧民窟の生活を自ら体験した彼にとって、短歌では表現しきれない強烈な経験を詩や小説の作品に結晶させていったと云ってよいでしょう。

処女詩集『涙の二等分』の自序の中で、彼は「この詩集は、過去十三年間の、神の前の私の呻きである。」と述べていますが、「神の前の私の呻き」とは、神の前における苦悩と云う意味だと思われますが、彼の場合は個人的な信仰の告白にとどまっていないと見るべきでしょう。

第二詩集『永遠の乳房』の序で、彼は「私の詩は、私の生活である。私の生活は私の詩である。言葉は、私の詩のいと小さい一部分にしか過ぎない。」とも断言しています。

近代日本の資本主義の原始的蓄積の過程で派生した貧民問題に、正面から体当りした彼らしい言葉とも云えるでしょう。貧民窟落涙詩集とまで云われた詩集『涙の二等分』の一節を紹介します。

おいしが泣いて、／目が醒めて、／おむつ襁褓を更へて、／乳溶いお石を拾ふて、／椅子にもたれて、／涙くる、／男に飽いて、／女になって、／ねると、／おいしが起す。　それでも、お母さんの、／気になって、／寝床を蹴立てて、／とんで出て／穢多の子抱いて、／笑顔する（以下略）

「貰い子殺し」専門の婆さんが、養育費めあての犯行を重ね、沢山の赤ん坊を死なせていたのです。〈男に飽いて、／女になって、／お石を拾ふて〉の一節は、詩人のユーモアが漂っています。

〈第23号〉

二〇〇七年春に最後の「貝の火」を刊行してからずっと、「詩誌」について考え続けていた。「貝の火」には確かにひとつの大きな自然発生的な「場」があったが、それだけに私自身の責任のようなものも生じていたような気がする。そしてその任を負うには、私自身の「時」を思うと、そろそろもう重い荷物を持つのは止そうと思ったのもまた事実である。もっと気楽に、たとえば私が突然消えたとしても、ただ空地に草が生い茂るように、何事もなく日が照り、花が咲き、小鳥や蝶や蜻蛉がその上を飛び交い、時が過ぎてゆく……そんな小さな空間ならあってもいい、と思い始めたのは梅雨が終わるころだった。何よりも「貝の火」に連載していながら中断している散文を、書き続けたいという思いもあった。そのなかの一つ、「風の起こる処」を書き始めた頃は、文書を中心に書き進めていたが、次第にそれでは物足りなくなり、実際に空海の生きた空間を訪れ、自分もまたその土地の光を浴び、風を感じてみたい、と思うようになって、「空海を巡る旅」を計画しながら、何年も果たせない歳月が続いた。今年の七月、ようやく最初の一歩を香川の善通寺に踏み出した。帰って来てから早速取りかかり、「惟」創刊号に掲載することが出来た。もう一つの「滴が海になるまで」も未完のままの作品なので、きちんと完成するまで、細々と書き継いでいきたいと思っている。さらに研究したい何人かの詩人や小説家、あるいは哲学者などが幾人かあり、この「惟」を基地として、少しずつ文学登山を試みようと思っている。

詩誌の名は、これから創り出すものは、自分独りで地道に勉強してゆくためのものになるようにと思い、その基本となる「思惟」のなかの一文字を取った。仏教用語に「五劫思惟」という言葉があり、阿弥陀仏がどのような浄土を作るかについて、五劫の長い間思いを凝らしたことをいうのだという。私の場合は残されたわずかな、過ぎゆく時のなかでのささやかな思惟にすぎない。

（「惟」創刊号より）

⑨〈詩誌紹介36 詩の発信基地「Poetry Edging」〉寺田 操

⑩会員情報―行事・受賞ほか

⑪〈訃報〉高橋 徹氏 ２００７年12月20日、肺炎で死去

⑫〈追悼〉「西垣矩美子氏を偲んで―２００７年12月９日没」 藤井 清

「強かに 薔薇は一輪でも華麗」 矩美子

西垣氏から戴いた冠句集「五彩の塵をこぼしつつ」で見つけた一句です。

編集者から、西垣矩美子さんの追悼文を書いて欲しいとの依頼を受けたとき戸惑いました。西垣さんには一度もお目に掛かったことがないからです。でも、引き受けることにしました。

今年の一月十日、西垣氏の弟さんから、昨年十二月姉が亡くなり遺品を整理していて、私の名前があったのでと、鄭重なご挨拶を戴いたこと。

今一つは詩集「さぼてんの月」を贈呈された時姿勢の正しい作品だと、感じたままを書き送ったのが気に入って戴いた様で、現代詩、冠句、俳句について何度か書簡を交わしたことが理由です。

西垣氏は、御自身が、詩集のあとがきで書かれている様に、小野十三郎氏に師事されたのがそのバックボーンとして存在していたのだと思っています。

一度お目に掛りたいと思いながら果たせぬままに鬼籍に入られたのが心残りです。

冒頭の句はそんな西垣氏の自画像のように思えてなりません。毅然と、芯の通った生き様を貫かれ、美しい言葉を紡いだ、珠玉の詩作品を数多く残され、特に冠句に情熱を注がれた西垣氏を思い、ご冥福を心からお祈りする次第です。

⑬会員の刊行物・県内情報など（6～11月）／詩誌・機関紙・雑誌／県外詩人団体詩集、県外詩人団体会報

⑭〈記録〉「〈四季と兵庫の詩人たち展―杉山平一氏講演より―〉スプリング ハズ カム ウインター イズ オーヴァー」 玉井洋子（別枠に表示）

★第24号（２００８年12月16日発行、８頁）

①〈報告〉11月16日。兵庫県民会館11階パルテホールにて第９回「詩のフェスタひょうご ２００８」が開かれた。それに先立ち、第24回理事会が開かれ、各事業担当理事より中間報告が行なわれた。懸案の協会ブログたちあげの件について討議の結果、ホームページ開設へ向けて準備会をつくることで衆議一決。毎年３月恒例の企画展（２００９年３月10日～15日）については、「リアリズムの詩人たち展」とタイトルを決め、賀川豊彦、林喜芳、イオム同盟などの資料収集にあたる。同時開催の詩画展作品募集についての応募要項も会報に同封する、ことなどを決議。

▽次に、たかとう匡子副会長より、日本現代詩人会との共催で７月に開催された「西日本ゼミナール in 神戸」への本会の協力に対する感謝がのべられた。岩成達也氏の「詩論の方へ」、安水稔和氏の「やっとわかりかけてきたこと」の講演二本立て。加えて大西隆志理事率いるアマチュアバンドのミニコンサートが行われた。

▽「詩のフェスタひょうご２００８」受賞者表彰式 午後１時、三宅武氏の司会により第一部開始。ことし９年目となる詩のフェスタ。実行委員長福井久子会長の挨拶に続いて、児童教育研究家長嶋和代氏による「はずむ心 はずむ言葉」と題する記念講演。応募総数８１０名。一般部門１２８名、高校生10校98名、小中学生78校５８４名だった

②〈エッセイ〉「賀川豊彦のプロフィル」谷田寿郎（別枠にて表示）

③〈エッセイ〉「秋の足音」鳥巣郁美

④〈エッセイ〉「紅葉などあれこれ」長尾佳枝

⑤〈エッセイ〉「空への手紙〈十一月〉」春名純子

⑥〈エッセイ〉「晩秋の日に」西川めぐみ

⑦〈エッセイ〉「国境の島 壱岐・対馬」工藤恵美子

⑧〈エッセイ〉「ブログ馬鹿からの意見」直原弘道

⑨〈詩誌紹介37「Loggia」について〉時里二郎

個人誌「ロッジア」を作ったのは、自分の作品を発表する場を作るため。現在ぼくが取り組んでいる作品群は、散文的なスタイルを持ち、長いものになりがちで、発表する場がほとんどないからだ。今まで長い作品を載せていただいていた詩誌が休刊になってしまったのをきっかけに、二〇〇八年一月から、この雑誌の創刊に踏み切った。年三回の刊行で、A５版。二〇ページ、クリップ留め。印刷も製本も家のパソコンで制作。従って八十部程度の制作が限界。これまで三号を刊行した。内容は、「歌稿ノオト註釈」という、父の遺した「歌稿ノオト」の部分と「ぼく」がそれを註釈した部分からなる作品が一編と、「ヒト標本」という人造人間を巡る作品の連作が一編、という二編構成。以下に、創刊号の後書きの一部を引用する。

『『ロッジア』は、ベンヤミンの『ベルリンの幼年時代』の中の一編『歩廊』という訳語が晶文社版著作集にはついている。岩波文庫版『ベンヤミ

⑩〈追悼〉「高橋 徹氏を悼む」中川道子

一九八三年十月から灌木第二次の発行人として、二〇〇二年一月発行の通巻五七八号終刊に至るまで、（一九五三年十一月創始者・喜志邦三氏による灌木創刊）毎月八日〆切で月一回の発行。

生前の氏曰く「詩作をいやだと思ったことはありません。ノートを広げて、季節の移ろい社会の現象、散歩で見かけた人のことなど、ごっちゃにある熟していないものの中から、最初の言葉がひらめくのを待つ。浮かんだところでさっと書く。何度も読み返し、手を入れる。生きがいでもあり喜びです。」

二〇〇一年秋頃に体調をくずされ、編集、発行の激務に耐えられなくなったのと、後継者がいなかったことなどで、終刊することになった。終刊の感慨はと聞かれて「ここらが限界。ああ、仕事は終わった。という気持ちです。喜志先生ようやく無事に終わりましたよ。と報告したい。」この日の朝日新聞を見て、私の日記には、高橋先生長い間本当に有難うございました。灌木の思い出は生涯忘れません。詩作のおかげで私の日々は充実していました。そしてこれからも。

芦屋浜の朝日カルチャーに、朝日新聞社在職中の氏が夜間の講座「実作現代詩」を開き、そのあと退職されてからは昼間となり、更に芦屋ラポルテへ移り、午前に講師を続けられた。私は芦屋浜からラポルテへと続けて受講した。その間に灌木の発送と会計（支出）を受けつぎ、時折氏が「毎月の発送など大変でしょう」とねぎらって下さり、その度に「ゲーム感覚でやってますから」と答えていた。

阪神・淡路大地震で家屋が倒壊し、それでもあと建て直され、元気になって下さると信じていました。芦屋のカルチャーにも点滴を打ちながら通われていました。灌木終刊のあと、詩誌ガイアの代表として活躍されていました。そのあと入院されていると聞きましたが、お見舞いは叶いませんでした。訃報は少しおくれて届きました。今は静かに眠っておられる高橋徹氏へ、心からの感謝と御冥福をお祈りします。もうすぐ一周忌。途方もない虹の立つ彼方へ。〔高橋徹氏 ２００７年12月20日、肺炎にて逝去〕

〈第24号〉

ンの仕事』の抄訳には『建物の中庭に面する側に作りつけられたアーケード風の回廊で、庭側には壁がなく、列柱が並んでいて、バルコニーのように使われる』と訳注がある。中庭に面して、建物の外側でもなく、内側でもないという境界に位置する空間と言えようか。風がかよい、夏には日除けの陰になって彼の幼年の揺籃となった。ロッジアはまた、中庭の世界へのパースペクティブと同時に内側の室内への眼差しをあやつることができる。『内側でもなく、また外側でもない』というロッジアのような境界的なスタンスを、ぼくは詩に対してとってきた。それは散文に『擬態』することによって詩というものを捉え直す試みと言い換えてもいい。詩は絶えず散文に対して開いていること、詩の境界を散文に曝していること。更に踏み込んで言えば、非詩なるものが詩をきたえるということ。例えば、『ベルリンの幼年時代』などのベンヤミンの散文は、どんなすぐれた詩を読むよりも。その断片の切り口からしたたり落ちるポエジーの闇の濃さとまばゆさに絶望し、また励まされる。」

⑩〈追悼〉「高橋 徹氏を悼む」中川道子（別枠にて表示）

⑪会員情報・動静／会員の刊行物（6～11月）／会員の詩誌／県外 詩人団体刊行書／県外詩人団体会報

★第25号（2009年6月17日発行、8頁）

①〈報告〉神戸市のパレス神戸で11月21日で開催された。第26回理事会が開催された。つづいて第13回会員総会が行われ、新役員が決定される。（会員総数189名）

（会長）三宅武（副会長）鈴木漠、たかとう匡子、松尾茂夫（事務局長）玉井洋子（会計）小西誠（常任理事）高橋夏男、谷田寿郎（理事）岩崎風子、大西隆志、尾崎美紀、神田さよ、紫野京子、時里二郎、たかぎたかよし、中堂けいこ（会計監査）在間洋子、高谷和幸、在間洋子

▽つづいて第二部として、谷田寿郎氏による講演「賀川豊彦の文学について」があった。今年三月に開催され、好評だった企画展「リアリズムの詩人たち展」をうけての企画である。

「コープこうべの店頭にかかげられている「ひとりは万人のために、万人はひとりのために」をまさに地でいった人。一大ベストセラーとなった彼の『死線を越えて』は、のちのプロレタリア文学の勃興に大きく貢献。労働運動、農民運動、共同組合運動、平和運動をさきがけ、自ら貧民街に入り、その身を賭して愛を実践した賀川豊彦。一伝道師などではくくれない。ノーベル平和賞候補にもあがったほどの世界に誇れる先達をもつ私たち。そして、神戸。賛否がわかれる彼の文学を、私たちはもう一度、現在という視座から謙虚に見直す必要がありそうだ。とつとつと語られる谷田氏のお話に、じんわり熱いものがこみあげてきた。」（報告者・玉井洋子）

②〈会長退任によせて〉「広い心の繋がりを」福井久子（別枠にて表示）

③〈エッセイ〉「こころの姿勢」村中秀雄

④〈エッセイ〉「動物記」はしむらゆきえ

⑤〈エッセイ〉「きぬゑさん」井口幻太郎

⑥〈エッセイ〉「私と高齢者大学」中津美津子

⑦〈エッセイ〉「円空仏の御利益」吉田草平

⑧〈報告〉「兵庫県現代詩協会ホームページ」紫野京子

⑨〈報告〉「歌と逆に。歌に。リアリズムの詩人たち展―たかとう匡子講演」玉井洋子

兵庫県現代詩協会が主催し、毎年開かれる企画展「兵庫県ゆかりの詩人たち展」も9回目。今年は3月10日から15日の日程で「リアリズムの詩人たち展」を開催。14日には当会副会長のたかとう匡子氏による「リアリズムの深淵」と題する講演会が開かれ、会場の神戸市灘区の原田の森ギャラリーには九〇人余が集った。

大正9年に出版された自伝的小説『死線を越えて』で一躍名を成した作家、詩人、組合運動の先駆者でもあり、現在の「コープこうべ」の創始者など多様な側面をもつ賀川豊彦。戦後姫路を拠点に結成された詩人集団「イオム同盟」。神戸の新開地を舞台に気を吐いた林喜芳など、郷土の先達詩人を検証する今回の企画。その中でもかつて交友のあった林喜芳と「イオム同盟」の高島洋を中心に約一時間のたかとう氏の講演。

戦地から復員してきた人たちによって昭和22年に結成された「イオム同盟」は、縛りのつよいアナキスト集団だったが、一切の権力を認めないアナーキズム自体は「文学の中だけで生き残った究極の理想」であったのではないか。高島洋はその中でも個にめざめた自我意識を詩の基本にし、すべて横並び、手をたずさえて現実をかえていくことをめざした。

また、露天商人、香具師、手相見などいくつもの職業を転々としながらその生活を言語化した林喜芳。彼の地べたからものを見る底辺の生活者のまなざしこそ「リアリズムの眼」である。

「リアリズム詩」ということを最初に明確に提唱したのは小野十三郎。彼は太平洋戦争のまっただ中の時代に、古い短歌的抒情を否定し、新しい詩をつくることをすすめ、多くの清新な詩集と膨大な詩論をのこした。

最近二か月かけてその詩論を再読破したという、たかとうさんが探り当てた深淵とは、やさしそうで難解な小野十三郎のメッセージにこめられた〈歌と逆に。歌に。〉の辺りにあるようだ。

一年前の本展企画段階では誰も想像だにしなかった今日の世界的経済危機と社会不安は、彼らが生きた時代と重なりあって、皮肉にも時を得た催しとなった。

⑩〈追悼〉鈴木絹代（2009年2月19日逝去）「ありがとう・鈴木絹代さん」佐土原夏江

②〈会長退任挨拶〉「広い心の繋がりを」福井久子

二〇〇五年六月に伊勢田史郎氏より会長職を引きついでから、二期四年がたち、今回退任いたします。前回、前々回の会長はじめ、理事の方々や諸会員の方々のお力を借りて無事に乗りこえられたのだと痛感し、感謝しております。

従来、兵庫県内外の詩人の方々とはそれ程緊密な関係を築くこともなかった私に転機を与えてくれたのが、一九九五年の阪神大震災と、兵庫県現代詩協会の設立でした。震災後に出版された「詩集・阪神淡路大震災」の下に集まった多くの県下の詩人達との交流を中心に、瓦礫の中からまるで吸い寄せられるように生まれ出だのが当協会であったと思われます。各々が強い個性と目的意識を抱いている者達の集まりですから、設立当初からこの会が一致団結して一方向に進んでいくなどとは、初代会長の安水稔和氏の設立総会の言葉にもありませんでした。「やわらかい絆でゆっくり」やりましょうということでした。二代目会長伊勢田史郎氏の退任挨拶には「ゆっくりとした歩みが……勢いだとか精神をつくりあげていくのだ」と中国古代伝説の王・禹の言葉を引いて解説し、現代詩協会の望ましい方向としてはお二人とも「ゆっくり」やろうということでした。

これら先輩会長のお言葉は、ともすれば、個性を重視するあまり唯我独尊に落ち入ったり、排他的な行動をとったりしがちな私達詩人への警鐘とも受けとれます。私共会員は現代詩協会の会員であることによって未知の方々との交流も容易で、それによって開けてくる新しい世界への参入も視野に入ります。相互の潰し合いではなく、言葉による繋がりを求めていきたいものです。因みに兵庫県現代詩協会会則、第一章総則の第一条に「この会は……詩人の親睦交流を図り、現代詩の普及発展のための相互交流や情報活動が円滑に行われることを目的とする」とあります。初心に帰りたいものです。

私の任期中特筆すべきことは、理事及び会員諸氏の協力によって、二〇〇八年七月二十六日に「日本現代詩人会　西日本ゼミナール・in 神戸」が日本現代詩人会と兵庫県現代詩人協会共催で開かれたことです。岩成達也「詩論の方へ」、安水稔和「やっとわかりかけてきたこと」など両氏の講演を中心に、その後朗読、懇親会があり、遠来の客のスピーチなどで、言葉の空間の広がりを実感しました。〈明日への架橋〉につながったでしょうか。

年間を通じての行事としては総会と講演会。十一月には「詩のフェスタひょうご」があり、県外から多数の応募者があり、言葉による表現に興味を抱いている人達の多いこと、また、ジュニア世代のすぐれた書き手のいることを実感しました。

当協会として力を入れているもう一つの催しは「ひょうご詩画展、兵庫・詩の現在展」と併催しているテーマ展です。二〇〇六年に「足立巻一と『天秤』の仲間たち展」、二〇〇七年に「神戸モダニズムの詩人たち展」、二〇〇八年に「『四季』と兵庫の詩人たち展」、二〇〇九年に「リアリズムの詩人たち展」と、兵庫ゆかりの詩人と関連のある詩運動を連続してとりあげています。今日生きて活動している私達を支えてきた歴史や当時の詩人達、その運動、表現、言葉を目にすることで改めて彼等を身近に感じ、自分達の方向性を考えさせてくれる催しです。

残念だったことは、年刊アンソロジー「ひょうご現代詩集」が資金繰りの関係で隔年刊となったこと。従って、二〇〇八年を飛ばして二〇〇九年版が出ます。全会員の参加によるアンケートの結果とはいえ、やはり、痛恨の極みです。近い日に会員諸氏の賛同を得て年刊になることを願っています。兵庫県現代詩協会が会員も含めた在存体として歴史に残るのは、言語表現の集体成である『ひょうご現代詩集』ではないかと考えるからです。

最後に、このような機会がなければ知り合いになれなかった多くの方々と御一緒することで、多様な詩の広がりを実感することができたことに感謝。さらに、広い心の繋がりを求めたいものです。〈第25号〉

⑪〈追悼〉石井習（２００８年８月２日逝去）

「追悼・石井習さん」たかとう匡子

もう俺は君達に期待してもらっていては困るんだ／俺は奴等のサロンにばかり巣食おうとする腐った内臓を／掴み出してやらねばならないんだ／思う存分其奴を啄んでやらねばならないんだ／そして俺が十分噛みくだいてから／奴等の植物性の血流を吐き出してやらねばならないんだ

一九五八（昭和33）年、神戸詩話会発行「手帖14」三月号から「君がやらなければ俺がやる」の第一連。同じく「手帖13」二月号にも「物干し場」という石井習さんの詩がある。いずれも、戦後詩のながれをひきうけて、詩には筆力があり、詩へ向き合う姿勢にも並みではない意気込みのようなものがひしひしと伝わってくる。当時は新日本文学会の詩部門が出していた詩の専門誌「現代詩」が、新日本文学会からはなれて独自の機関誌として飯塚書店に発行所を移し、また「現代詩の会」ができて、全国に広かっていた時期でもあった。その「『現代詩』を読む会」を神戸にも作ってそこを母体に、大江昭三さんたちが「神戸詩話会」をつくり、「手帖」はその会の詩誌として毎月発行されていた。そして私のはじめての詩は一九五七（昭和32）年の「手帖10」十一月号に掲載されているから、ここが私の詩の出発点だったのだなあと今懐かしい思いがしている。

私の十代の終わりごろで、石井習さんと私はこの「手帖」で出会った。あのころは神戸も詩が元気だった。「手帖」には大江昭三さんの片腕でもあった谷田寿郎さんや、坂東寿子さん。今は亡き岩淵欽哉さんたちがいた。私は解らないことだらけで、聞くことに追われて話すことなどとうていできなかったが、そのころの石井習さんは現代詩についてよく習熟された方という印象が強く私にはあった。

それにしても、私の手元のこの一葉のハガキが石井習さんとの最後になってしまった。日付は二〇〇八（平成20）年五月十六日。そこには、現在肝臓腫瘍治療のため三回目の入院中であるから、五月十八日の「福中都生子氏の偲ぶ会」にはやむなく欠席せざるを得ない状況だとある。それからわずか二ヵ月半後の永訣である。私はずっと、石井習さんは私の先輩詩人の一人だと思ってきた。

「退院できましたら、一度またどこかでお出会いしたいと考えております」と結ばれたこの一言が、今私の心に痛い。

⑫会員の情報・動静／会員の刊行物／会員の詩誌――の紹介

★第26号（２００９年12月16日発行、８頁）

①〈報告〉神戸市の兵庫県民会館で11月21日で第26回理事会が行われた。つづいて「第10回ふれあいの祭典　詩のフェスタひょうご２００９」がスタートした。応募総数６９９名（一般部門１０４名。高校１３６名。ジュニア部門４５９名）。午後一時、受賞者とその家族で会場が埋まり、表彰式がはじまる。第一部は、谷田寿郎氏の司会で進行。実行委員長・会長三宅武氏の挨拶。続いて詩人で児童文学研究者、尾崎美紀氏による講演。テーマは「ころがることばひろがることば」。講演を聞いて「（講演で取り上げられたまどみちおの詩は）誰もが知っていることばで書かれているが、ここには、詩人、まどみちおの哲学がある。こうした表現にいきつくまでにまどさんは沢山のことばをころがしてこられたんだろうな」「尾崎氏は、児童文学の分野で、かぎられたことばで、人に自分の思いを伝える可能性を深く追求してこられた人だけに、納得させられるものがある。講演を終えた彼女に駆け寄るひとりの高校生。若き日の太宰治を思わせる風貌の、初々しい学生服姿がとても印象的だったなあ。」と報告したのは玉井洋子氏。

②〈新会長〉「アンソロジーのことなど」三宅武（別枠に表示）

③〈エッセイ〉「詩人村野四郎のこと」伊丹公子

ふりかえり思うに、私は若いときから、昔の話を聞くのが好きだった。だから、私よりずっと年長の人は惜しまずに昔の話をしてくださった。その話を聞いていた日自体が、茫茫たる昔となってしまったのだから、幻想に近いようなことなのであろうが、いまも、ひどくリアルな感覚で、身の内にある。その遥かな人々は、この世を去ってしまわれた。その別れの悲しさのたびに、私は死を知ったのだと思う。そして、私自身が、懐しき人々と同じ年齢になった。昔々の話が、いっそうリアル感を帯びてくるのは、神か、宇宙か、なにか知らないところから与えられる時間というものの所有している不思議なのであろうと思っている。

懐旧のひとびとは多いが、詩の世界でいえば、村野四郎、伊藤信吉、竹中　郁、小林武雄氏らがいる。村野四郎は、詩の師であった。師事への経緯を書く紙数はないので措くが、東京の千石にある先生宅は、私の詩の個人教室で、年に四回ほど通学していた。熱帯魚が泳ぎ秋は鈴虫が鳴いた。

そこでは、詩の書き方といった実際的なことではなく、詩とは？という、抽象的な考え方が、普通の会話のなかに、流れて在った。詩作との直接のかかわりは、ご自身の実作や、海内、海外の詩人たちの実作をもって語られた。私の持参した、多くの詩稿は、瞬時に選んでくださった。

先生は、詩人としての仕事の中で季刊詩誌「無限」（慶光院芙沙子編集・発行）の顧問的役割も西脇順三郎、伊藤信吉、草野心平、田中冬二、山本太郎氏らと共に果しておられた。またそのころ二度、関西への旅をされた。一度目は当時私たちが発行していた俳誌「青玄」の大会へ、講演者と

②〈新会長〉「アンソロジーのことなど」三宅武

近頃、文庫本の『唐詩選』を読んでいる。きっかけは、私にとって幻想だったのかと思える、ある風景のせいだ。

小学校五年生のとき、日本の敗戦があった。外国軍占領下の数年という経験は、敗戦の事実の重さよりも、カルチャー・ショックに似た思いの方が大きかった気がする。

当時の新聞には、「国破れて山河在り」という言葉がよく使われていた。まだ私は、これが千二百年昔の「詩」の、最初の五字であることに、気づいていない。敗戦直後の大倉山。現在神戸市立中央図書館のある東側あたりの寺院の石垣に、杜甫の「春望」全文とおぼしきものが、白ペンキで書かれていた。大倉山には高射砲陣地があったと聞いていたから、武装解除後、部隊の誰かが書き残したものだったとも考えられる。

大倉山から市街を見渡すと、鉄道の高架だけが目立っていた。三宮駅から聚楽館まで見えている、一面の焼け野原。しみじみと、国破れて山河ありという感があった。

中学三年生になっていただろうか、占領何周年記念かの軍事パレードが、神戸でも行われた。ジープの列や、武装米兵たちを見た記憶がある。

この日、白ペンキは、布で隠されていた。隠したのは日本人だと直感した。「セコイ」という印象を受けた。何でもかでも、「ＧＨＱの命により」だ。復讐のテーマ「忠臣蔵」もご法度の時代だった。―この話は一度書いたかと思う。

「春望」を読んでみたいと突然思い立って、文庫本『唐詩選』を購入。載っていない。知らなかった私は、さらに『中国名詩選』を買った。

ついでに一海知義や小川環樹の書も求めた。一海先生によれば、「国破」は国家機構が破れたことであり、戦争で「敗れた」のではないという。私が、これまで思っていた主観的な理解とは大いに異なっていることなどが分かった。

ネットで検索。『唐詩選』を編んだのは李攀竜ではなく、攀竜の『古今詩札刪』から別人が抜粋した偽書で、注釈も唐汝詢の『唐詩解』からの盗用だという説があるらしい。

とはいえ、『唐詩選』というアンソロジーのおかげで、私はいま中国の古典を読むことができるのだ。詩は永遠の鼓動だ。杜甫の鼓動は千二百年後の異国の少年の体に共鳴したのだ。

漢文にレ点をつけ、日本語で耳触りよく読み下す技術は、すぐれた発明だ。このように「半ば翻訳」された詩文は、世界に類例を見ないと思う。

『唐詩選』には、「春望」ばかりでなく、白居易の詩が無視されていることも、私は、いい歳をして初めて知った。

私は、『木賃宿（終刊）』、『位置（廃刊）』、『現代詩神戸』『第三紀層』に所属した。またこの協会に入会して十年余を経た。

青春時代、気に入った詩人がいる人は幸せだ。とにかく私は、あやしげな読解力で古今東西を問わず濫読した。定時制高校の同級生の伯父が、元町で「ごらん書房」という古書店を営んでいた。ここで買った『別所直樹詩集』と、落丁のある御庄博美の『岩国組曲』の、まったく傾向の違う二人を、私はとくに気に入っていた。

それとは別に、私が詩を書き始めたころに頂いた詩誌を思い出すと、それらは青春の時間とともにあった。京都の『ロシナンテ』は高価そうな活字であった。顔見知りの君本昌久氏の『ＯＮＬＹ　ＯＮＥ』は黒いラシャ紙に白い文字で印刷された変形版だった。この前身は同じスタイルの『ＪＡＰ』だったのかと思うが、もはや溶暗の彼方だ。

個人詩集は、めったに出なかった。伊勢田史郎氏の『幻影とともに』の出版記念会がリリックで開かれ、私は初めて出版記念会に参加した。

『詩集神戸 1959』は、私が初めて出会ったアンソロジーだ。二十五歳のときだった。ページを繰る。それぞれの顔と作品が心に浮かぶ。活躍中、長く作品を見ていない人、物故者等々。以後現代詩神戸はすべて自薦で、節目ごとのアンソロジーを八冊出している。

兵庫県現代詩協会も、自薦によるアンソロジーは十巻を重ねた。こうした書の価値は大きい。

ギリシャ語の「アントロギア」＝「花を摘み集める」は、アンソロジーの語源だそうだ。『旧約聖書』の「雅歌」はさておき、『唐詩選』、『万葉集』に似た意図で編まれたアンソロジーはどこの国にでもあるのだろうか。

目下の関心は、やはり「春望」。かの日の大倉山の写真が、どこかに残っていたら見たいものだ。

〈第26号〉

してお招きしたとき。翌日、神戸の街をご案内した。ポートタワーに昇り、回転茶房の窓が山側に回ったとき、遠い日を語られた。渡欧の詩友を神戸港に見送り、六甲山ホテルに泊まった日のことを。二度目は先生の死の前年の京都への旅である。招かれ、ご家族の旅にご一緒した。嵯峨野、琵琶湖畔を巡り琵琶湖ホテルに泊まった。この旅の先生の詩「京の寺」は、「無限」34号に。私の詩「詩人の嵯峨野」も同号に収載くださった。

④〈エッセイ〉「幸福」という謎」黒住考子
⑤〈エッセイ〉「不思議な喫茶店」豊崎美夜
⑥〈エッセイ〉「働き方」に思う」松本康久
⑦〈エッセイ〉「日露戦争の体感」西村好子
⑧〈評論〉「日本モダニズム資料考」西村昭太郎
⑨〈評論〉「はじめは短い行分けの詩を書いていた　～詩の周辺をさまよって　その1」時里二郎
⑩〈エッセイ〉「コーヒーにますか　それとも紅茶にしますか」望月宏三郎
⑪会員の情報・動静／会員の刊行物／会員の詩誌――の紹介／県外の詩人団体会報／県外詩人団体発行本

★第27号（2010年6月22日発行、8頁）

①〈報告〉第11回理事会／第14回総会（6月6日）が2010年6月6日、平成の大改修が行われている国宝姫路城のお膝元、姫路文学館で開催された。

▽新年度の事業内容について、①現在アンソロジーの出版が隔年となっているが、県の助成金に左右されないで、毎年発刊できないか。②毎年3月に企画展を実施してきたが、来年度あたりで一度区切りをつけてはどうか。③名誉会員、顧問になられた時点で、運営から遠ざかってしまわれる元役員の現状を見直しては、などの動議が出されたが、三案共に結論を持ち越した。また、来年3月15日から20日に予定している企画展は『蜘蛛』の仲間たち展」とし、記念講演会には伊勢田史郎、安水稔和両氏を招きたいと事業担当の鈴木漠氏よりの案が出され、多くの賛同があった。開催される。▽講演は、当会会員でもあり、第43回H氏賞ほか多数の受賞歴のある以倉紘平氏による講演。「時代の悲（カルナー）を宿した芸術」―良寛の毬つき唄を中心に―が行われた。

「長男に生れながら実家の庄屋を継がず出家した良寛26歳の7月、浅間山の大噴火。いわゆる天明の大飢饉。火山灰による冷害にやむなく子供を売る村人も。〈子供らと手まりつきつつこの里にあそぶ春日は暮れずともよし〉。良寛さんと仲良く手毬をつくこの子供たちが、貧困のためやがて売られていく身だったとすれば、やさしい良寛さんの毬つき唄の奥には、雪ふかい越後の救いがたい飢餓の記憶がよこたわっている。そんな貧しさの中でも、托鉢にいけばお布施を差し出す村人、唄でかえす禅僧良寛。そこに通い合う〈慈悲〉」といった内容だった（報告・玉井洋子）。

②〈詩史〉「『KEEL』「現代詩神戸」「蜘蛛」などのこと」小西誠（別枠に表示）
③〈エッセイ〉「六感で」在間洋子
④〈評論〉「竹中郁の背後にあるもの」季村敏夫
⑤〈エッセイ〉「いつかソレントへ」土屋宜子
⑥〈エッセイ〉「富士探訪」山下晴久
⑦〈エッセイ〉「納音」今村欣史
⑧〈詩誌紹介38〉「『風箋』創刊号によせて」かただときこ
⑨〈評論〉「行分け詩から散文詩へ　～詩の周辺をさまよって　その2」時里二郎
⑩〈追悼〉「追悼・松尾繁晴さん」松尾茂夫
⑪〈訃報〉松尾繁晴氏　2009年12月10日死去。
⑫会員の情報・動静／会員の刊行物／会員の詩誌――の紹介

②〈詩史〉「『KEEL』「現代詩神戸」「蜘蛛」などのこと」

小西誠

私がいつ頃から詩を書き、どのように詩誌と関わって来たかを遡ってみたい。そのことで神戸の詩誌の一端が紹介できれば幸いである。

今ここに三冊の詩誌がある。「KEEL」「現代詩神戸研究会資料」「蜘蛛」いずれもセピア色に変色しているが、忘れられない詩誌である。

まず「KEEL」との出合いは一九五九年初頭に岩渕欽哉に会ったことから始まる。彼は三菱神戸造船所の仲間を集め同人詩「存在」を発行しており、同人は二十歳前半の若い直接労働者で、生産現場から生の言葉を発信することをモットーにしていた。三号から誌名を「KEEL」と改めたのは船の好きな岩渕の好みによるものであろう。

私は「KEEL」四号（一九五九年五月刊）から参加し「日本の春」「泡」の二篇の詩を載せたのが詩誌に作品を発表した最初である。「日本の…」は皇太子成婚を題材にした諷刺詩であった。

当時、企業のサークル活動から詩のリトルマガジンが生まれ、所謂社会派と呼ばれる詩集団があちこちで生まれていた。時まさに「安保闘争」の波の中で、サルトルの「アンガージュマン」の言葉に後押しされるような文学活動が押し進められたのではないかと思う。

八号（一九五九年十二月刊）では特集「安保阻止国民運動のために」を編んだり、国民文化会議全国集会に参加する等、急速に政治活動への傾斜が深まって行ったが、そのことが災いし企業からの目に見えない圧力や「安保」後の挫折感もあって、退職や自殺未遂などが出た。一方で革新団体青年部の指導者となって会社を辞めた仲間もいて、一九六〇年末に十二号発行を最後に解散した。

今、「KEEL」を知る人は極少ないだろうが、私にとっては忘れられない。

「KEEL」に参加することで神戸の詩のグループ（「詩壁」「位置」など）との交流や「現代詩神戸研究会」にも参加するようになった。

「現代詩神戸研究会」は一九五一年一月に資料第一号が出ているが当時の事を知る人は少ない。

私は第三十三号（一九五九年五月刊）に「殺害者は誰か」という詩を出した記録が残っている。災害死を扱った詩作品だったが、三十四号では前号の合評会の記録が載っており「リアリティにとぼしい」「孤独に真正面から取り組んでいない」とか手厳しい言葉が交わされた痕跡が伺える。

ここで出合った中村隆、伊勢田史郎、一条寺鉄男（直原弘道）、なかけんじ　などリーダー格を中心に、神戸の詩集団を横断的に纏める役割を果たしていた。私にとってありがたかったのは、同世代の赤松、安部、北見、子森、三宅、松尾、さかた、岩渕など例会の帰りには安酒を飲みながら詩論や政治談義の仲間入りが出来たことである。その顔ぶれの多くが鬼籍へと旅立っている。

今も「現代詩神戸」として和田英子を中心に定期刊行されており、次号で二百三十二号となる。

更に「蜘蛛」は一九六〇年十二月に神戸を中心とした詩と批評の総合雑誌として創刊された。中村隆、君本昌久、伊勢田史郎、安水稔和の四氏が中心に企画編集されたもので、後記の（主張）には「一九六〇年は歴史的意味をもっております。それは戦後十五年を迎えたことによって『一つの時代は終った』ということであります。つまり、世界の現実は物質的勝利の時代が始まっていることであり、五・一九（筆者注・一九六〇年五月十九日「安保」法案が強行採決された）を転機とし市民の胎動が起こっているということであります。この時代状況をいかに受け止め、記録し、定着させていくべきかを詩人の課題としたい」と書かれている。この（主張）は五項目が記されており、神戸モダニズムの再検討や神戸詩史の記録、詩壇の中央化の清算、新人の実験の場としての紙面提供などが掲げられている。

二号では「戦後神戸詩史」特集が組まれ、神戸のリトルマガジンの動向や「戦後十五年」を節目として、戦後を再認識しようとする詩人の熱い眼差しが感じられる。

その「蜘蛛」二号に詩作品を出すように中村さんから声がかかって、詩原稿「船の伝記」を湊川公園下の金物屋を営む中村さん宅に持参した記憶が残っている。

その後一九六五年五月「八号」で活動を終えているが、兵庫詩史に銘記すべき事業であろう。

来年三月には当協会の企画展『『蜘蛛』の仲間たち展」が計画されており、兵庫の戦後詩が私達の世代にも身近に感じられ、楽しみである。〈第27号〉

兵庫県現代詩協会　会報第52号　特別付録

会報バックナンバー②

■発行所＝兵庫県現代詩協会事務局《山本眞弓》〒651-0091 神戸市中央区若菜通6―4―15―203 Tel.078―241―3086
▽発行人＝《時里二郎》（兵庫県現代詩協会会長）
▽会計＝《玉川侑香》
▽会報特別号・責任編集＝《大橋愛由等》／編集協力＝《安西佐有理》
■印刷＝《遊文舎》〒532-0012 大阪市淀川区木川東4―17―31 Tel.06―604―9325

■編集あとがき＝兵庫県現代詩協会が発行する会報52号特別号の「会報バックナンバー②」をお届けします。この特別号は、協会が1997年12月に発足して25年を迎える節目に、企画・編集・発行する冊子です。収録しているのは、18号から27号まで。当時の会報編集担当者の奮闘もあって各号とも充実した内容となっています。誌面の都合上、この特別号に掲載できなかった文章も多く編集担当者としては断腸の思いです。冊子には、物故した会員の文章や、死去した会員の追悼文を紹介しているほか、〝戦後の兵庫詩史〟について貴重な文章・証言も掲載しています　（大橋記）